

令和 5 年 6 月 28 日現在

機関番号：35305

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01657

研究課題名(和文) 必修期の「表現系ダンス」における双方向的で創造的な学びを実現する指導モデルの構築

研究課題名(英文) Building the teaching model which realizes interactive and creative learning in the compulsory classes for "expressive dance"

研究代表者

安江 美保 (Yasue, Miho)

ノートルダム清心女子大学・人間生活学部・准教授

研究者番号：80580729

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,600,000円

研究成果の概要(和文)：表現系ダンスの指導における固有の質感の動きを有する教材「2人の戦い」では、「体をねじる」ことを核にしつつ、床を使って動きを連続させたり、すばやく・ストップ・超スローで速さに変化をつけたりする指導と重ね合わせていく。多様な質感の動きを有する教材「新聞紙を使った表現」では、「全身を極限まで使う」ことを核としつつ、異なる質感を組み合わせたたり繰り返したり、上下左右の空間や踊る場所を変えたりする指導と重ね合わせていく。教材によって重点課題は異なるが、そこには表現系ダンスに共通して学ばせたい内容があり、それらを「対極の動きや質感の連続」「体幹部を立体的に表現的に使う」「空間や関係の変化」と結論づける。

研究成果の学術的意義や社会的意義

表現系ダンスは、「表したいイメージ」を「どのように表すか」が個々によって異なるゴールフリー学習に特徴がある一方で、作文や絵の指導と同様にゴールフリー学習ならではの難しさが存在する。学習者が、表現する動きの「ある」がまますを認めるだけでなく、どう「なっていく」ことがより面白さや魅力に深く触れていくのか、「これだけは指導したい」という指導の重点を明らかにするところに本研究の学術的意義と社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)：The teaching material of the expressive dance "Fight of Two" which has a movement expressing the unique texture, focuses on teaching "twisting body" and also superimposes to teach using the floor to make continuous movements and changing speed of movement such as quick-moving, stopping and extreme-slowness. While the material "Expression using Newspaper" which has movements with a variety of textures, focuses on "using the whole body to the limit" and also superimposes to teach combining and continuing different movement textures and changing space and position including left, right, up, down and etc. The teaching materials in the expressive dance class have common elements which lets students learn, although priority issues are different depending on the materials. The author concludes that the elements are "opposite movement and continuous textures", "Using core of the body expressively and three-dimensionally" and "Change in space and connection".

研究分野：舞踊教育学

キーワード：表現系ダンス 指導モデル 熟練・未熟練指導者 これだけは学ばせたい内容 3つの重点課題 3つの重点課題を関連させた指導

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1 . 研究開始当初の背景

(1) 表現運動系及びダンス領域の位置づけと教育的意義

表現運動系 (表現リズム遊び・表現運動) 及びダンス領域は , 明治以降「唱歌遊戯」から「フォークダンス」へと内容が変遷してきた流れに加えて , 昭和 22 年学習指導要領改訂から「表現系ダンス」(表現・創作ダンス) が , 平成 10 年学習指導要領改訂から「リズム系ダンス」(リズムダンス・現代的なリズムのダンス) が加わり , 「フォークダンス」「表現系ダンス」「リズム系ダンス」の 3 つの内容からなる領域として今日に至っている。中でも「表現系ダンス」は , 表したいイメージについて自由に動きを工夫して踊り表現する (文部科学省 , 2013) ことに運動の特性 (楽しさや魅力) がある。「表現系ダンス」の学習では , 題材やテーマなどを手がかりに , 「いま , ここ」で感じた身体感覚をもとに「何を」「どのように表すか」という課題解決的で創造的な学習が展開され , これらの一連の学習を通じて「身体による豊かなコミュニケーション能力」を培うことができる (文部科学省 , 2013) 。

(2) 双方向的で創造的な学びを先導してきた「表現系ダンス」の魅力と指導上の問題

「表現系ダンス」の学習では , 「何を」「どのように表すか」という課題解決的な学習において , 「習得」した動きを「活用」する授業展開そのものが往還的に行われ , 指導者と学習者 , 学習者双方との間で , 双方向的で創造的な学びが実現される。

ところが , 実際の授業の現場においては , 教師が内容を決めてしまう「既成作品の模倣」や , 教師からの指導がなく進められる「放任的な作品創作 , 作品発表」などが行なわれ , 「表現系ダンス」の特性や学習内容が教師に十分理解されぬまま授業実践が行われている実態があることが明らかにされている (中村 , 2009 ; 山崎 , 2013) 。これは , 双方向的で創造的な「表現系ダンス」の指導において , 学習者がその特性に深く触れていくために , 何をどのように指導するのかという指導の道筋や指導の重点にかかわる実証的な研究が不十分なためではないかと捉えられる。

2 . 研究の目的

(1) 表現系ダンスにおける典型的な題材・テーマとして , 固有の質感の動きを有し内容のひと流れを創り出す「2 人の戦い」と , 多様な質感の動きを有し動きのひと流れを創り出す「新聞紙を使った表現」の 2 つを取り上げ , 「何をどのように指導するのか」という視点から指導案モデル を作成し , 複数の熟練指導者による実践 を通して , 指導案モデル の成果と課題を明らかにする。

(2) 指導案モデル の成果と課題から , 「何をどのように指導するのかを見直す」視点から指導案モデル を再構築し , 複数の未熟練指導者による実践 を通して , 表現系ダンスにおいて双方向的で創造的な学びを実現するために「これだけは指導したい内容」を明らかにする。

3 . 研究の方法

(1) 専門家会議による指導案モデルの検討と実践についての協議

専門家による会議を設定し , 指導案モデルの検討と実践についての協議を行う。メンバーは , 舞踊学 , 舞踊教育学専門 , 平成 10 , 20 年告示の小学校学習指導要領作成協力者の A 氏 , 大学へ内地留学しダンス領域の専門的な研究を深めた中学校教諭の B 氏 , 豊富な実践研究の実績を有し文科省作成の教材 DVD に制作協力した小学校教諭の C 氏 , 舞踊教育学専門で現行の小

学校学習指導要領作成協力者である本研究の研究代表者，舞踊学，舞踊教育学専門で，ダンサーとして全国規模の大会での文部科学大臣賞受賞歴のある本研究の研究分担者の5名である。

(2) 研究対象

○熟練指導者(4名)の実践 (年齢は実践当時): 熟練指導者A(担任, 指導歴32年, 女性55歳, 小学校3年生で実践), 熟練指導者B(担任外, 指導歴28年, 女性51歳, 小学校5生で実践), 熟練指導者C(担当, 指導歴27年, 女性50歳, 中学校1年で実践), 熟練指導D(担任, 指導歴32年, 女性55歳, 中学校1年生で実践)

○未熟練指導者(6名)の実践 (年齢は実践当時): 未熟練指導者H(担任, 初の指導, 女性23歳, 小学校3年生で実践), 未熟練指導者I(担任外, 数回目の指導, 男性33歳, 小学校3年生で実践), 未熟練指導者J(担任, 数回目の指導, 男性29歳, 小学校5年生で実践), 未熟練指導者K(担任外, 指導歴5年, 女性33歳, 小学校5年生で実践), 未熟練指導者L(担当, 初の指導, 男性32歳, 中学校1年生で実践), 未熟練指導者M(担任, 初の指導, 男性28歳, 中学校2年生で実践)

(3) 検証授業の進め方

○熟練指導者の実践 : 実践2週間前までに指導案を送付又は電話にて授業実践の説明をした。「2人の戦い」実践及び授業者, 参観者にて協議会(研究代表者が主担当)を実施した。1週間後を目安に「新聞紙を使った表現」実践及び授業者, 参観者にて協議会(研究分担者が主担当)を実施した。授業者が授業の省察カードを, 参観者が参観者カードをデータで提出した。

○未熟練指導者の実践 : 実践2週間前までに出向いて授業実践の説明, 教師の示範の練習を行った。「2人の戦い」の実践及び授業者, 参観者にて協議会(研究代表者が主担当)を実施した。1週間を目安に「新聞紙を使った表現」の実践及び授業者, 参観者にて協議会(研究分担者が主担当)を実施した。授業者が授業の省察カードを, 参観者が参観者カードをデータで提出した。

4. 研究成果

(1) 熟練指導者による実践の成果と課題

成果として次の3点が挙げられる。1点目は, 指導案に示した身に付けさせたい動きの具体例や選曲, 教師の働きかけなどの例示を多く記載したことは, 熟練指導者にとっても有益な情報であったこと。2点目は, 身に付けさせたい動きの例は学習課題を具体的にしたものであることから, その後の指導に一貫性を持たせることにつながったこと。3点目は, 熟練指導者に実践してもらうにあたって若干の自由度をもたせたことにより, 発達の段階やクラスに応じた展開の仕方が熟練指導者から提案されたことである。この点は, 指導案モデルにおいても多様な展開例を示すための情報となった。熟練指導者が強調して学習者に指導していた動きやポイントにより, 学習者が運動(題材のイメージがもつ動き)のおもしろさに触れる様子が授業の中で確認され, その重要性が確認された。

課題として次の2点が挙げられる。1点目は, 指導案モデルの段階で必要な情報を多く記載したが, その量が多すぎると指摘されたこと。内容を精査するとともに, より重要な記述について分かりやすい表記を工夫する必要がある。2点目は, 熟練指導者であっても「ひと流れの動き」の理解が様々であったこと。表現系ダンスの究極の目標(「ひと流れの動き」)がその

特性の根幹になるはずであったが、その認識が本研究側側に不十分であり、熟練指導者への事前説明も不十分であった。指導案モデルを作成するにあたり、特性の根幹部分（「ひと流れの動き」）とその重点を別に記載するなどの工夫が必要であると考え。

(2) 熟練指導者の実践の成果と課題から指導案モデルの再構築に生かしたこと

熟練指導者の実践から明らかとなった成果と課題をもとに、指導案モデルにおいて修正した点は次の3点である。1点目は、「全体の構成」についてである。指導モデルでは、[主なねらい・学習活動][教師の働きかけやその意図]の項目を設け、その中にその意図と、動きや言葉がけの例を示した。指導モデルでは、そこに新たに[活動や働きかけの意図][言葉がけの例]を加えて、[主なねらい・学習活動][教師の働きかけ][活動や働きかけの意図][言葉がけの例]の4つの項目から指導をより具体的に示した。2点目は、「主なねらい・学習活動」について。【ほぐし】の活動の後に【本時の学習課題の確認】を設定し、順番を入れ替えた。「本時の学習課題」を2つの教材に共通する内容とし、別に「重点課題」を3点に絞って提示した。さらに「重点課題」を一貫した指導の視点となるよう、教師の働きかけの項目に重要課題と関連する箇所を色付けにして強調した。3点目は、「教師の働きかけ」についてである。予想される子供のつまづきとその対応の例を で具体的に示した。

(3) 未熟練指導者による実践 「2人の戦い」から明らかとなったこと

「2人の戦い」の授業では、本時の学習課題を解決するために、「体をねじる」「すばやく・ストップ・超スローで速さの変化」「床を使って動きを連続」の3つの重点課題を設定した。「体をねじる」「床を使って動きを連続」の重点課題は、体幹部を立体的に表現的に使うことに繋がり、非日常の世界へ没入して踊るといった表現系ダンスの特性に触れる基盤となっていく。このことは、下の学年ほど行われやすく、上の学年ほど行われにくく意識されにくい傾向が見られた。これは、学習の積み重ねの不十分さとともに、上の学年の児童・生徒が、日常生活の中で下の学年の児童のように全身を使って遊ぶ機会が減っていくことも要因の1つとして考えられる。そのため、上の学年ほど毎回の授業の「ほぐしの活動」で、体幹部を中心に全身を使って律動的に弾むような活動に重点を置いて積み重ねていくことが重要であり、そうすることによって授業の中で特に「体をねじる」ことが意識されやすくなるを考える。

また、「すばやく・ストップ・超スロー」の指導では、言葉がけでリードすることはできていたが、この指導が、単に速さに「変化」がつけたいのではなく、「誇張された変化」になっていないとメリハリが生まれてこないことへの理解が不十分だった。真に「すばやく」、真に「ストップ」、真に「超スロー」にこだわった指導が不十分でその点が今後の課題である。

(4) 未熟練指導者による実践 「新聞紙を使った表現」から明らかとなったこと。

「新聞紙」は具体的なイメージと動きを結びつけて踊る内容ではないため、「動きのひと流れ」を創り出すことは、「内容のひと流れ」を創り出すよりも難しいことが改めて明らかとなった。新聞紙を使って「動きのひと流れ」を創り出すには、授業者が新聞紙の可塑性に富んだ「新聞紙の質感の違いを理解すること」と、その「多様な質感をどのように身体で表現するかを具体的にイメージすること」の2つの技術が必要となることも改めて明らかとなった。これらの指導の技術を指導案上や補足資料等でどのように示すかが今後の課題である。

「新聞紙を使った表現」は、「全身をギリギリまで使う」「メリハリ（緩急強弱）をはっきりつける」「移動も入れて動きを連続させる」の3つの重点課題を設定した。「全身をギリギリま

で使う」ことにより、身体の細部まで使うことで極限的な動きが生まれ、体幹部を使うことで動きが立体的になる。新聞紙の質感を誇張するためには、このような身体の使い方を押さえ、非日常的な動きを促せるように重点課題を設定したい。また、「移動も入れて動きを連続させる」の指導では、移動中に新聞紙の高さを変えながら操ったり、移動しながら低い姿勢で回転することで、上下左右の空間の変化も同時に起こると考えられる。

言葉がけについて、未熟者指導者も教師が新聞紙を操ってリードする場面において、新聞紙に操ることに夢中で言葉を発さない指導者、新聞紙の質感をイメージさせる言葉や新聞紙の動きを解説する言葉を発する様子が見られた。しかし、どうやったら新聞紙のように見えるのか、という具体的なイメージの例示や重要課題と関連させた言葉がけをした未熟者指導者は少数であった。この一歩踏み込んだ指導が未熟者指導者には難しく、特に2人組の活動中に児童・生徒の動きの何を見てどのように言葉をかけるのか、という動きを評価する視点が少ないことが推察される。ここを補填するように、指導案には言葉がけの例を多く含めていきたい。

(5)「2人の戦い」と「新聞紙を使った表現」における「これだけは指導したい内容」について

両題材・テーマにおける「これだけは指導したい内容」について、以下のようにまとめる。固有の質感の動きを有する「2人の戦い」の授業において、「誇張と変化のあるひと流れの動き」を創り出すために「これだけは指導したい内容」は、「すばやく・ストップ・超スロー」で対極の連続による動きのメリハリを学ぶことが一番の核となり、そこを含めながら「体をねじる」と「床を使って動きを連続」を関連させながら指導し、体幹部を立体的に表現的に使うことができるようにしていくことである。そしてさらに、それらを含めながら「空間や相手との関係に変化をつけて」いくことを加えていくと、戦い方のバリエーションが広がり、特性により深く触れていくことが可能となる。

多様な質感の動きを有する「新聞紙を使った表現」の授業において、「誇張と変化のあるひと流れの動き」を創り出すために「これだけは指導したい内容」は、対極の質感の動きを組み合わせた連続による動きのメリハリを学ぶことが一番の核となり、そこを含めながら体を不規則に極限まで使って見たこともない動きを連続させながら体幹部を立体的に表現的に使うことができるようにしていくことである。その際、「2人の戦い」と異なってくることは、なれない新聞紙にもものになるうとする身体の動きに対する大胆で繊細な想像力が必要となる点である。そしてさらに、それらを含めながら「移動も入れて上下左右の空間や相手との関係に変化をつけて」いくことを加えていくと、新聞紙を使った表現のバリエーションが広がり、特性により深く触れていくことが可能となる。

このように、表現系ダンスでは、取り上げた題材・テーマごとに「これだけは指導したい内容」が異なるものの、そこには、表現系ダンスに共通して学ばせたい内容が含まれていると捉えることができる。本研究ではそれらを、「対極の動きや質感の連続」「体幹部を立体的に表現的に使う」「空間や関係の変化」と結論づける。

<引用文献>

- 文部科学省(2013)学校体育実技指導資料第9集 表現運動系及びダンス指導の手引, 東洋館出版社; 東京.
- 中村恭子(2009)中学校体育の男女必修化に伴うダンス授業の変容 - 平成19年度, 20年度, 21年度および24年度の年次推移から - (社)日本女子体育連盟学術研究第26号, pp.1-16.
- 山崎朱音(2013)ダンス授業実践に向けた実技研修の在り方: 静岡県内中学校教員のダンス授業の実施状況の把握を通して, 静岡大学教育実践総合センター紀要 21, pp.73-81.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安江美保, 山崎朱音
2. 発表標題 「表現系ダンス」における双方向的で創造的な学びを実現する指導（3） - 固有の質感の動きを有する題材・テーマ「2人の戦い」の実践から「これだけは指導したい内容」について再考する -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 山崎朱音, 安江美保
2. 発表標題 「表現系ダンス」における双方向的で創造的な学びを実現する指導（4） - 多様な質感の動きを有する題材・テーマ「新聞紙を使った表現」の実践から「これだけは指導したい内容」について再考する -
3. 学会等名 日本体育・スポーツ・健康学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 安江美保, 山崎朱音
2. 発表標題 「表現系ダンス」における双方向的で創造的な学びを実現する指導（2）
3. 学会等名 日本体育学会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 安江美保, 山崎朱音
2. 発表標題 表現系ダンスにおける双方向的で創造的な学びを実現する指導について - 小学校における表現「対決」の授業づくりのプロセスと熟練指導者・未熟練指導者の実践から見えてきた課題に着目して -
3. 学会等名 日本体育学会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 山崎朱音, 安江美保
2. 発表標題 創作ダンスの授業における指導者の指導経験の差にみる「動きをみる観点」
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	山崎 朱音 (Yamazaki Akane) (40609301)	横浜国立大学・教育学部・准教授 (12701)	

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	村田 芳子 (Murata Yoshiko)		
研究協力者	川村 由美 (Kawamura Yumi)		
研究協力者	森 智子 (Mori Tomoko)		

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------